

vivo

水戸芸術館音楽紙 [ヴィーヴォ]

12

DECEMBER 2003

CONTENTS

| | |
|-------------------------------|----------|
| ミト・デラルコ第6回演奏会 |1、2 |
| クリスマス・プレゼント・コンサート2003 |2、3 |
| アートタワーみとスターライトファンタジー&300人の 第九 | ...3 |
| 最近の公演から |4 |
| ネタマ |5 |
| インフォメーション |6 |



水戸の街に響け! 300人の 第九



ミト・デラルコの新しい航海が始まる。 12 / 13(土)ミト・デラルコ第6回演奏会

長い間奏曲でした。第2ヴァイオリンのドミトリ・バディアロフが2002年4月の第4回演奏会を最後に退団してから約1年半。その間、3人編成を余儀なくされたミト・デラルコは、フォルテピアノの小島芳子をゲストに迎えた「18世紀風」プログラム構成によるモーツァルトの音楽会という、ふだんのカルテット編成ではなかなか試みる機会のないチャレンジを行いました。しかしその間にも新しいメンバー探しは続いていました。試演を重ねた結果、メンバーたちがこれからのパートナーとして選んだのはソフィー・ジェント。オーストラリアの西海岸パースに生まれ、モダン楽器のヴァイオリニストとして頭角を現しながら、オリジナル楽器演奏の世界に深く心を魅せられ、ハーグ音楽院で学んだ若き俊才です。この度ハーグ音楽院を最優秀の成績で卒業しましたが、すでにラ・プティット・バンドやカプリッチョ・ストラヴァガンテなどヨーロッパを代表するオリジナル楽器アンサンブルと共演、また自らのグループ「オペラ・クアルタ」や「グラナディア・トリオ」の一員として活躍しています。去る9月にグラナディア・トリオ(フォルテピアノの平井千絵、クラリネットのニコラ・バウドとのトリオ)は来日公演を行いました。颯爽とした演奏で古典派の名曲秘曲に生気を吹き込み、聴衆にさわやかな印象を与えていました。

ソフィー・ジェントについてはまず、ハーグ音楽院で彼女を指導した、MDAメンバーの寺神戸 亮(同音楽院教授)に紹介してもらおうことにしましょう。

以下はeメールによるインタビューです。

Q1: 寺神戸さんがソフィーさんに出会ったのはいつですか。そのとき、彼女の音楽からどのような印象を受けましたか。

確か94年、オーストラリアのパースで講習会をしたときにはじめて会いました。

パース大学音楽学部のヴァイオリン科教授ポール・ライト氏の方針でバロック・ヴァイオリンに親しむことを強く勧められた生徒たちが何人か受講していました。

ソフィーはその中の一人だったのですが、そのときから彼女の才能はずば抜けていて、非常に強い印象を受けました。

このような人が本気でバロック・ヴァイオリンを勉強する気になってくれたらどんなにいいだろうと思いましたし、これからこのような才能がバロックの世界にどんどん出てこなければいけないと思いました。

Q2: Q1と重なる部分もありますが、寺神戸さんが考えられるソフィーさんの演奏の特徴についてお聞かせください。できれば、彼女のキャラクターについても併せてお聞かせください。

今まで主に教師と生徒と言う関係で付き合ってきましたので知らない部分が多々あるとは思いますが、音楽に対しては非常に真摯であり、まじめで研究熱心です。しいて言えばまじめすぎる

ころもあるくらいで、もう少し肩の力を抜いて演奏すれば、と思うこともあります。

彼女の演奏の一番の美点は、人を感動させることができる、ということです。

派手な表現に走らず、音楽の本質に迫っていくとする姿勢をいつも崩さず、そのための努力を惜しみません。

ヴァイオリンから深みのある音を引き出し、真っ向からむかって行く、正統派の演奏家だと思います。

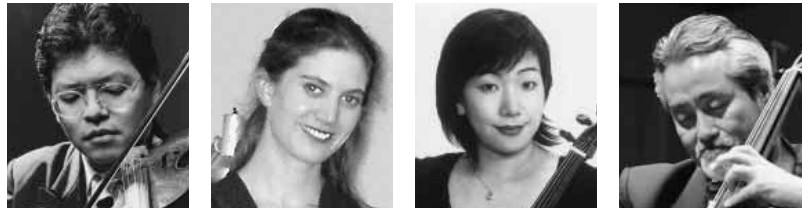
Q3: ミト・デラルコでソフィーさんを加えたりリハーサルをやってみて、どのような印象を受けられましたか。

まずアンサンブル全体がしっくりいく感じだったのには驚かされました。

相手を立てる、ということをよく心得ていて、伴奏に回ったときは徹底的にサポートします。しかし単なる内声、伴奏としての役割だけではなく必要などころでは十分に自分を主張します。このことによってこれからさらに各声部の有機的な関係が磨かれていく可能性を感じます。

彼女は弾きながらいたずらにみんなと目を合わせたりはしませんが、よく周りを聴いていて動がいいので、リハーサルに多くの言葉を必要としません。結果的にリハーサルの時間が短縮され、能率的に曲が仕上げられるようになっていくと思います。また彼女はリズム感が非常によいので、内声部のリズム的な構築性がより安定し、結果的に上声部はより自由に表現できるようになります。

写真左から；
寺神戸 亮
ソフィー・ジェント
森田 芳子
鈴木 秀美



Q4:今後、彼女が加わったミト・デラルコはどのような可能性の広がりをみせるとお考えですか。

アンサンブルとしての機能性がより増し、表現に自由さと柔軟性が出てくれば、近い将来古典派を抜け出て、初期ロマン派の方へレパートリーを広げていけるといいと思います。

MDAは去る7月にソフィー・ジェントを迎え今回のプログラム決定のためのリハーサルおよび試演を行い、確実な手応えを得ました。寺神戸 亮へのインタビューにもあるように、初共演ながら積極的にアンサンブルに食い込み、精彩ある音楽的対話を展開して行く彼女の演奏は、ミト・デラルコの演奏をいっそう活気づけ、力強い推進力を与える活性剤となってくれそうな気がします。つづいては、ソフィー・ジェントからのコメントをご紹介します。

7月にMDAとのリハーサルで日本に行ったのですが、奇しくも私にとってそれははじめて日本を訪れる機会でもありました。リハーサルも日本滞りも、どちらも忘れ難く楽しい体験でした。グループはとてもよいスタートを切ったと思いますし、私はとても心地よく皆さんに歓迎されました。リハーサルの間、12月のコンサートのためにたくさん曲を弾いたのですが、すばらしい弦楽四重奏のレパートリーを体験することもまた喜びでした。このクアルテットの一員となることにほんとうに興奮していますし、これはほんとうに楽しく、そして私にとって学ぶべきことの多いものになると思います。

今回のプログラムはハイドン(アッポニー四重奏曲 第2番 および エルデーディ四重奏曲 第1番) およびモーツァルト(ホフマイスター) というウィーン古典派の巨匠による名作3曲という「王道」のプログラムです。ハイドンの2曲はい

ずれも1790年代、モーツァルトの死後に書かれたもの。私たちはどうも歴史的に「ハイドンが先でモーツァルトが後」という順番で考え勝ちですが、モーツァルトが世を去った後も深化しつづけたハイドンの音楽を、モーツァルト作品と比較しつつ聴くことによって、気がつかなかったハイドンの凄さもまた見えてくるかもしれません。ロンドンの聴衆を意識した交響的スケールの広がりが特徴的な アッポニー四重奏曲 第2番、晩年の精緻をきわめた境地 エルデーディ四重奏曲 第1番 どちらもたいへんな聴き応えのあるものです。もちろんモーツァルトの ホフマイスター も、中期の傑作 ハイドン四重奏曲集 から晩年の プロイセン王四重奏曲集 をつなぐ充実の名曲。精妙さと迫力とを共に備えたオリジナル楽器四重奏の響きで、存分にこれらの名曲をお楽しみいただきたいと思います。12月13日、ミト・デラルコの新しい船出にご期待ください! 《矢澤》

あっと驚く仕掛けに満ちた聖夜の音楽会 12 / 23(火・祝)クリスマス・プレゼント・コンサート2003

多彩なプログラムでご好評をいただいているクリスマス・コンサート。今年も、豪華な出演者を迎え、ヴァラエティーに富んだプログラムでお届けします。企画・おはなしは、お馴染みの畑中良輔が務めます。

ATM初登場!! 小原孝のピアノようたえ!

ピアノ曲といえば誰もが一度は演奏を試みる最強ナンバー!? ねこぶんじゃった をパラフレーズし、ショパンやリストなどクラシックのピアノ曲の演奏はもちろん、吉田拓郎、スマップ、宇多田ひかるなどのJ-POPを鮮やかにピアノ曲として生まれ変わらせる、今最も多忙で人気のピアニストのひとり小原孝さんが、水戸芸術館のステージに登場します。現在も放送中のNHK・FM「弾き語りフォーユー」や多くのCDなどから、小原さんのお名前や演奏をご存知の方もきっと沢山いらっしゃるのではないのでしょうか。さて、今回のクリスマス・コンサートは、幕開けとなる第1ステージ「ピアノようたえ!《小原孝の世界》」で小原さんが登場します。どのような演奏を披露してくれるのでしょうか?それは当日のお楽しみです!!

KEIKO Carmenに隠された秘密?

オペラの中でも、もっとも知られた作品の1つであるのがビゼー作曲 カルメン 。クリスマス・コ

ンサートでは、「KEIKO Carmenの贈り物」と題し、カルメン の中でもとりわけ有名な3曲 ハバネラ、セギディーリャ、ジブシーの唄 が演奏されます。妖艶な魅力のカルメンを演じるのは、メゾ・ソプラノの青山恵子さん。青山さんは、これまで「日本の歌・この100年」(00年)や「畑中良輔の日本の歌セミナー」(01、02年)などで水戸芸術館のステージに登場していただいております。実は、今回のKEIKO Carmenには、ある隠された演出が考えられています!! 青山さんもノリノリで、目下、共演の小原孝さんも巻き込んで目論みはエスカレートするばかり!?さて、どんなステージになるのか乞うご期待!!!

日本の伝統美

今年のプログラムの大きな特徴は、ヨーロッパで育まれた、いわゆるクラシック音楽のみならず、わが国の伝統的な芸能や音楽の要素が盛り込まれている点です。そうしたわが国の伝統美をじっくりとご堪能いただけるのが「茶音頭 三曲合奏とお点前による」のステージです。作曲は「京物」の地歌三絃曲の名作を多く残した菊岡検校(1792-1847)、八重崎検校(1776?/85?-1848)によって替手式の箏の旋律が付されています。歌詞は茶の湯の用語をつづり、男女の仲が未永く

続くことを願うというもの。本来は、地歌・箏曲として演奏が行なわれる作品ですが、今回はなんと、演奏に合わせてお茶のお点前も披露されます。水戸芸術館「茨城の名手・名歌手たち 第12回」(01年)に出演し、さらに水戸市内を拠点に全国各地で精力的に演奏活動をされている水木結さん(三絃)をはじめ、岡村慎太郎さん(箏)、横田鈴琥さん(尺八)という邦楽奏者の方々と共に、水戸市内に所在する関口中社の倉田涼子さん、仲田明子さんがお点前を披露してくれます。

私たちの愛する歌

日本の音楽をテーマにしたプログラムにはさらに、「滝廉太郎 没後100年に」と「母から子へ、受け継がれる歌の宝物 二つの愛唱歌と作曲者による変奏曲」の2つのステージが挙げられます。前者は、タイトルの通り、没後100年となる滝廉太郎の作品が取り上げられます。彼の「荒城の月」が、わが国で最初の芸術歌曲と評されることからもお分りの通り、滝廉太郎は、日本の「うた」の伝統と西洋音楽の要素とを融合させた最初の作曲家であったのです。今回の演奏会では、彼の歌曲に加え、生涯にたった2つだけ残されたピアノ曲 メヌエット と 憾 が演奏される貴重な機会でもあります。出演は、前述の青山恵子さん(メゾ・ソプラノ)、「茨城の名手・名歌手たち」や市



写真左から；
小原孝、青山恵子、
クリスマス・コンサート2002より

民オペラ「ヘンゼルとグレーテル」(98年)など水戸芸術館のステージに度々出演している会沢明美さん(ソプラノ)、水戸芸術館初登場となる2人の男声歌手 小野勉さん(テノール)、堀野浩史さん(バス)、伴奏は小原孝さん(ピアノ)です。

後者は、誰もが愛する名歌、山田耕伴作曲「わたしたちの花」と成田為三作曲「浜辺の歌」が取り上げられます。しかし、一筋縄ではいかないのが今年のクリスマス・コンサート!? 実はこの2曲はいずれも作曲者自身の手により変奏曲に仕立て上げられており、今回はこの変奏曲もお楽しみいただけます。出演は会沢明美さん(ソプラノ)、青山恵子さん(メゾ・ソプラノ)、小原孝さん(ピアノ)。

祈りの音楽

聖なる夜に音楽の祈りを添えるのが「聖夜に捧げる現代の祈り」メシアン: 幼子イエスに注ぐ20のまなざし より」と「クリスマスを迎えて 讃

美の大合唱」の2つのステージです。メシアンのステージに登場するのは水戸市在住の中村佳代さん(ピアノ)。昨年のクリスマス・コンサートでも本作品の中の1曲が中村さんによって演奏されたのですが、その時のステージがあまりに神々しく聴衆の胸を打つものであったことから、今回も再登場していただくことになりました。幼子イエスに注ぐ20のまなざし は、そのタイトルからもお分りの通り、飼葉桶の中で生を受けた幼子イエスに注がれる、様々なまなざしがテーマになっています。それは、父なる神のまなざしにはじまり、聖霊、聖母、天使、予言者、占星術の学者、そして時、十字架、沈黙といった抽象的な存在によるまなざしにまで至ります。そして、最後は愛に満ちた教会のまなざしで閉じられる感動的な作品です。今回は第1曲「父なる神のまなざし」と第14曲「天使たちのまなざし」が演奏されます。

クリスマス・コンサートの掉尾を飾るのが「クリ

スマスを迎えて 讃美の大合唱」のステージです。出演は、水戸芸術館のステージにも度々出演している水戸の名門合唱団あひる会。指揮は同合唱団の常任指揮者である鈴木良朝さん、ピアノ伴奏は山田陽子さんです。あひる会が得意とするのは中世、ルネサンス期の合唱作品。今回はそのレパートリーの中からグレゴリオ聖歌とルネサンス期の作曲家ビクトリアのモテットが取り上げられます。そして、最後は「あら野のはてに」と「オー・ホーリー・ナイト」という世界中で愛されているクリスマス音楽が奏されます。

クリスマス・コンサートの定番となったプレゼントが当たる大抽選会を今年も行います!是非、大切な人と一緒に、聖夜の音楽会をお楽しみください。

《中村》

アートタワーみとスターライトファンタジー 12/6(土)第8回 クリスマス・コンサート [市内小中学校 芸術館コンサート]

冬の夜空を彩る幻想的なイルミネーション 水戸芸術館や水戸駅をライトアップするアートタワーみとスターライトファンタジーの季節が今年もやってきました。コンサートホールでは、同イベントの一環として、水戸市内の小・中学生が日頃の音楽活動の成果を披露する「クリスマス・コンサート」を開催しています。この日の舞台は子供たちが主役!ちょっと緊張した面持ちで、しかし誇らしげにステージに上るその姿が、毎年とても印象的です。今年は、17校、20団体が出演を予定しています。金管合奏や吹奏楽をはじめ、合唱、器楽合奏、ハンドベルなどの演奏が行われます。入場無料です。お気軽に足をお運びください。《中村》

[午前の部(10:00~12:50)]

常磐小、双葉台小、渡里小、堀原小、千波中、第五中、見川中、石川中

[午後の部(14:00~16:55)]

柳河小、五軒小、酒門小、笠原小、飯富中、双葉台中、第二中、常澄中、第四中



師走の水戸に高らかに響き渡る

よるこびのうた
“An die Freude”

12/21(日)水戸の街に響け! 300人の 第九

日本の年末の風物詩といえばベートーヴェンの 第九 99年と2000年に水戸芸術館でも公演を行い、大きな話題となった300人の 第九 が帰ってきます。

ドイツの楽聖ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)が残した9曲の交響曲は、英雄 運命 田園 など、それぞれが意義深く、個性的な光を放つ作品ばかりですが、とりわけ 第九 は、この作曲家の交響曲創作の総決算とも言える傑作です。終楽章に独唱と合唱が加わるのがユニークで、シラーの頌歌「歓喜に寄す」をテキストに人類の理想的なあり方が歌われます。

公演の主演は、水戸市民を中心とした老若男女300人以上からなる大合唱団です。経験を問わず広く一般の方々に参加を呼びかけ、7月末日で応募を締め切ったところ、前回は上回る多数のご応募をいただきました。その一般公募の方々に、茨城県合唱連盟、水戸市合唱連盟の方々の力強いサポートが加わります。現在、鈴木良朝さん、菅波ひろみさん、堤五郎さんの指導のもと、猛練習に励んでいるところですが、回を重ねるごとにはっきりと上進してきており、指揮を務める鈴木良朝さんも「前2回より手応えがある」と語っています。本番では高らかな歌声が、師走の水戸の街に響くことでしょう。

独唱は、「茨城の名手・名歌手たち」出身者を中心に実力派歌手たちで揃えられ、またオーケストラ・パートは2台のエレクトーン、2台のピアノ(ヴァーグナー編曲によるピアノ版を演奏)、ティンパニが務めます。(出演者の詳細は、同封のちらしをご覧ください。)300人の大合唱に拮抗し、ともに音楽を盛り上げる独唱と器楽にも、どうぞ注目ください。

今年一年の締めくくりとして、様々な出来事を思い返しつつ、第九の力強い音楽に浸ってみてはいかがでしょうか。入場無料の広場公演ですので、どうぞお気軽にお立ち寄りください。(悪天候の場合は、コンサートホールATMで開催します。)

《関根》

最近の公演から
OCTOBER



1



2



3



4



5



6



7



8

班目加奈トランペット・リサイタル(10月4日)
ヒンデミットやハルトウニヤンといったトランペットのための難曲で構成した前半は、打掛をアレンジした和風のドレスで。バーンスタインの「ウェストサイド物語」を主役に据えた後半は、黒いノースリーブのドレスで。曲想に合わせ衣装を変える班目さんに、観客から快いどよめきの声上がる。自分のコンサートに来てくれたからには、聴いても観ても楽しんでほしい、という班目さんの思いが、熱演共々伝わってくるステージだった。それをしっかり支えたのが名手・本莊玲子さん。ショパンの「ノクターン」とガーシュウインの「プレリュード」という2曲のソロもはさみ、ステージを一段と盛り上げた。確実にファンを県内に増やしつつある班目さんの、これからのますますの活躍をお祈りします。アンコールはロイド・ウェッパ「メモリー」。《矢澤》アンケートから「女性ならではの、細やかな表現が印象的でした(水戸市:K.T.さん)」班目先生、最高のいい演奏を聞かせてもらってありがとう(東茨城郡:Y.I.さん) 茨城の演奏家が、これから活躍されて我々を楽しませて下さったり、いい影響を与えて下さったりするとありがたいです(水戸市:K.T.さん)

佐藤篤 ピアノ・リサイタル(10月18日)
「シリーズ 同世代を生きた作曲家達~その2~ 20世紀作曲事情 実験か創造か? その伝統破壊のウソほんとう」と題して、20世紀に作られたさまざまなピアノ作品が取り上げられた。現代作品では、その構造やテクスチャの複雑さから、ピアノ曲と言えど楽譜を見ながらの演奏が一般的なのだが、この日の佐藤さんの演奏は、ダラピッコラの12音音楽も含めすべてが暗譜で行われた。その姿勢から佐藤さんのこの演奏会に対する気概が感じられた。佐藤さんは、可憐なイベル作品からプロコフィエフの大曲に至るまで、各作品の性格の違いを見事に弾き分けていった。アンコールは「ショパン:ノクターン 嬰八短調 レント・コン・グラン・エスプレッシーオーネ」、「シューベルト:4つの即興曲D.899より 第2曲 アレグロ」の2曲。《中村》アンケートから「とてもきれいな音を奏でていて素晴らしかったです。ピアノを弾いている姿もとても美しかったです。(日上市:R.S.さん)」プログラム構成、演奏者の技術、音響、全て文句なしのリサイタルでした。印象に残る好演だったと思います。(世田谷区:A.U.さん) 大変意欲的プログラム! プロコフィエフ、ブーランクの順で好きでした。元々、力のある人だと感じました。(大洗町の方)

畑中良輔の「日本のうた」セミナー 第3期
「別宮貞雄」(10月19日)

山田耕筰からはじまり、日本歌曲の重要な作曲家を年代順に取り上げてきた畑中良輔氏によるこのセミナーも、とうとう第二次世界大戦後へと進み、今回は別宮貞雄を取り上げた。研究曲は、歌曲集「淡彩抄」と「さくら横ちよう」。平井康三郎や中田喜直などと比べ、ポピュラリティという点で若干劣る別宮貞雄の歌曲が、いかに味わい深さと豊かな抒情性を持っているかを、畑中氏は力説した。レッスンを聞きながら、曲を繰り返し味わうことで、聴講の方々も次第に別宮歌曲の魅力に惹きこまれていった様子。4人の受講の方々も、畑中氏の熱のこもったレッスンに必死に食らいついていた。ゲストによるミニ・コンサートには、ソプラノの小泉恵子さんが登場。別宮歌曲のほか、同時代の柴田南雄、中田喜直の作品も取り上げ、清らかな歌声で聴衆を魅了した。《関根》アンケートから「音楽というものの本質の深さを知らされた。気のつかなかった句、音、フレーズを生かし、作者の心を読み、思いやる点など、とても参考になり、入口の勉強になりました。大変感銘を受けました。(日上市:T.K.さん)」詩の解釈がわかりやすく、楽しい中で受講できた。詩を読むことが、やはり大切だとわかった。声の出し方をもう少し、特に日本語の歌い方を教えて欲しかった。(滋賀県:無記名の方)

ヴェルサイユの舞踏会(10月25日)
「アナ・イエベスが踊った!」というだけでも、コンサートホールATMの歴史に残る夜。リチャード・ブースピーのガンバの熱演をバックに、紫色のドレスをまとったイエベスがフォリアを踊り始めると、たちまちステージにはスパニッシュな香りがただよび始める。もちろん他のダンサー3人もイエベスの薫陶を受けた見事な踊りで、ビョークに似たベゴニヤのソロや、男性2人の時にコミカルな振る舞いが観客を魅了。さらにスージー・ル・ブランが歌に演技に舞踊にと八面六臂の大活躍。衣装の早変わりや芸術館の衣装スタッフも大活躍。音楽家たちの精度の高いアンサンブルに支えられ、17世紀ヴェルサイユ宮廷の「軽やかな荘厳さ」が芸術館の時を止めた。《矢澤》アンケートから「あっという間にtime tripしてヴェルサイユに行っていました(ひたちなか市:K.M.さん)」友人の「vivo」で知り上野から特急で来ました(松戸市:Y.Y.さん) 音色を帯び、踊り手という花を得て蘇る古の躍動に、静かな感動(水戸市:T.N.さん) 音楽、歌、おどり、すべて満足です(水戸市:MAMAさん) 人間に踊りという文化が生まれた理由を感じてきた気がした(水戸市:T.T.さん) フォリアやサラバンドがこんなに情熱的だったとは(東茨城郡:K.M.さん)

1~2. 班目加奈トランペット・リサイタル 3~4. 佐藤篤 ピアノ・リサイタル 5~6. 畑中良輔の「日本のうた」セミナー
7~8. ヴェルサイユの舞踏会

